

現代俳句 やまぐち

第 85 号



大島大橋（周防大島町）

山 口 県 現 代 俳 句 協 会

第32回 山口県現代俳句大会作品募集要項

1. 趣 旨 広く県民から作品を募集し、その優秀作品を大会において顕彰し、俳句文学の発展振興を図る。
2. 大会日時 令和4年5月29日（日） 13：00～
3. 会 場 周南市文化会館地下練習室（周南市公園区）
4. 主 催 山口県現代俳句協会
5. 後 援 毎日新聞社、現代俳句協会
6. 募集要項 第32回山口県現代俳句大会作品募集要項による
 - （1）応募先
〒745-0825 周南市秋月2-4-18 久行方
 - （2）応募締切
令和4年3月31日（木）必着
7. 選 者 山口県現代俳句協会役員
8. 講 演 交渉中
9. 賞 現代俳句協会会長賞、毎日新聞社賞、山口県現代俳句協会会長賞
他

令和4年度山口県現代俳句協会総会のご案内

本年度の山口県現代俳句協会の総会を下記のとおり開催いたします。会員の皆様のご出席をお願いします。

1. 日 時 令和4年5月29日（日） 11：00～12：00
2. 場 所 周南市文化会館（地下練習室）
3. 議 題
 - （1）令和3年度事業・決算報告
 - （2）令和4年度事業・予算案
 - （3）第26回山口県現代俳句賞表彰式
 - （4）その他

第85号 目次

第三十二回山口県現代俳句大会作品募集要項	
令和四年度山口県現代俳句協会総会のご案内	
令和三年度第3回理事会報告	1
雑感をつづる	安永 一孝 2
第八十四号 作品鑑賞①	松原 君代 4
第八十四号 作品鑑賞②	片山 淳子 6
会員作品	8
第三十回勉強会報告	平川扶久美 16
作品募集・支援基金	19
告知板	

表紙「大島大橋（周防大島町）」

令和3年度第3回理事会報告

日 時 令和3年12月12日（日） 13時30分～
場 所 山口市「小郡ふれあいセンター」
議 案

- ① 第30回山口県現代俳句勉強会の報告
- ② 第31回山口県現代俳句勉強会の実施について
令和4年4月の理事会において決定する。
- ③ 第26回山口県現代俳句賞の実施について
- ④ 第32回山口県現代俳句大会の実施について
令和4年5月29日（日）周南市で予定
- ⑤ 令和4年度山口県現代俳句協会総会について
令和4年5月29日（日）周南市で予定
- ⑥ その他

（報告者・事務局長 平川扶久美）

雑感をつづる

副会長 安永 一孝

この二年、世界はコロナウイルスの感染拡大に翻弄されて来た。その為、通常の活動が制約され、世界経済は大きく落ち込む結果となった。これよりは、その経済の回復が各国の大きな課題となってくるのである。



わが国では、この感染拡大で首都東京が緊急事態宣言の中、史上初めて延期された「第三十二回夏期オリンピック大会、および十六回夏期パラリンピック大会の東京大会」が開催された。オリンピックは七月二十四日開幕した、そしてパラリンピックは九月五日をもって閉幕したのである。コロナ禍の中で原則無観客の異例づくめの大会となった。開催に当たっては是非を巡る世論が割れ反対の声がやや大きめであったが、期待と不安の交錯する中でのことである。結果としては、アスリートの皆さんから多くの感謝のことが聞かれた。



その閉幕二日前の九月三日には、菅首相が自民党本部で開かれた党の臨時役員会で、総裁選への不出馬を表明された。これにより菅政権は一年の短命で終ることになり、読売新聞の記事に「五輪イヤー退陣シンクス」として掲載されていた。それによると「池田勇人首相は、日本初開催となった東京五輪の閉会日翌日の一九六四年十月二十五日に退陣を表明した。池田氏は、五輪に向けて新幹線や高速道路などの整備を加速させたが、開会式前の同年九月に喉頭がんで入院を余儀なくされていた。池田氏の後を継いだ佐藤栄作首相は、札幌五輪から五か月後の七十二年七月、七年八か月にわたる長期政権に幕を下ろした。橋本龍太郎首相は九十八年二月、長野五輪を現職首相として迎えたが、七月の参院選で大敗し辞任に追い込まれた。」という。このシンクス何んとなく説得力がある様に思えてくるのである。



コロナ禍の影響は、俳句の世界にもあった。特に我々のところにある。その一つが句会であるが、大体句会の会場は公共施設が多く使われている。例えば第五波の感染拡大では、八月九月は施設の利用が止められることとなった。従って月一回の例会が二か月間流会を余儀無くされたのである。何んでも無い様であるが、何か普段のリズムが狂わされた様であると同時に、評価がないと自分の作品にも自信がもてなかつたりする。

もう一つは、吟行である。これも少人数ならば何か工夫をすれば出来ると思うが、十五人以上位になるとなかなか困難となるのである。特にマイクロバスあたりで少し遠出を企画するとしたら、まだまだ怖くて踏み切れないであろう。それも予算化して定例の年中行事としているとしたら、次の一手がむづかしく困難なものとなってしまうのである。

その他にも、各種俳句大会は、この二年の間中止したり紙上開催とする苦肉の策をとることにもなったのである。



これは私事であるが、昨年十一月頃妹宅より一株の藤袴を根分けしてもらった。それを前庭の一隅に植えてお

いたら、その生命力たるや盛んで夏には一メートル四方程の群落となった。秋の七草の一つであるが、高さ一メートル余、花は淡紅紫色で茎の上に群がって咲く。

唯、花を觀賞するだけで貰って来たのではない、その花に浅黄斑の大型の蝶が来てくれることを期待してのことである。問題は一メートル程の花を探して飛翔して来てくれるかである。九月頃より咲き出したが、その姿はなかなか現れない。少し諦めかけた十月の某日、その姿があるではないか。それも一羽ではなく二羽四羽と、それから毎日今日はどうかと、気に掛ける日が続いた。

蝶は広辞苑によると「マダラ蝶科の大型のチョウ、翅は青灰色半透明で前翅の翅脈と外縁に沿う部分は黒く、後翅の翅脈と外周部は濃褐色、幼虫の食草はガガイモ科の植物で、年に数回発生、成虫が長距離移動する。」という。早く言えば渡り蝶である。私の感想では清楚な美しい蝶と思っていて、また来年の秋が楽しみとなった。



コロナウイルスも落着き、令和四年が平穏であることを祈るばかりである。

作品鑑賞（第八十四号）

松原 君代

寒雀宿はいらぬかほうやれば

石川 芳己

餌が乏しくなる冬、人家近くに餌を求めて集まる寒雀。羽毛を膨らませて丸々と可愛い。ほうやればは鳥追いの言葉だが、お宿を貸そうと呼びかけている優しい句。

晩鐘に打たれ別るる蝶二つ

伊藤 愛子

夕暮れのお寺の鐘。ゴーンと響き、外で遊んでいても家に帰らねば怒られると思った幼い日。連れ合っていた二頭の蝶も別れて行った。家に帰ってゆくのだろうと…。

おもむろに流し目呉れる炬燵猫

井原三都子

猫は実に気儘である。飼い主に阿ることもなく、気の向いた時は甘えて来るが、気の乗らない時はこの句のように流し目程度である。炬燵に陣取って動かない。

夜半の春鼠小僧の居る気配

上石久美子

春のとつぷり更けた夜。朧なる夜気の中で、ものみなが曖昧模糊として、物の怪の気配すらする。ふっと時代劇で見た鼠小僧でさえ其処にいるような気配。

風光る色鉛筆の十二色

上重 石峰

憧れの十二色の色鉛筆。買って欲しいと言えなくて大人になつたら一番に買うことにしようと思つた色鉛筆。

風光る陽光に今もきらきらと眩しい。

春雷の一撃煩惱解けてゆく

上野 昭子

「春雷の一撃」と強い表現だが、春の雷は数度で終り優しい。万物が目覚め命の営みの始めとなる虫出しの雷である。煩惱も溶けてゆくという感覚が縷々伝わるのだ。

蘇へる平家の無念朝霞

尾倉 雅人

長門国赤間関壇ノ浦（現在の下関市）で行われた平家最後の戦い。その地を散策しながらの詠であろうか。朝霞の中で往時に思いを馳せれば平家の無念が蘇る。

天と地の間を借りて大屋寝

片山 淳子

これまたなんと大らかな豪快な天衣無縫な昼寝であることか。無心に眠る嬰兒を見ている母の至福の時空。その眼差しもまた大いなる愛の眼差しなのである。

虎柄の蝶は二頭で連れ合う

河村加南子

虎柄の蝶という発見が面白い。実感でなければ書けない一句だ。対象をじっくり観るといふ俳句の基本だと習ったことを、見事具現した一句。

セミナリヨ跡にながなが蛇の衣

河村 正浩

セミナリヨは神学校の意。蛇は神、或いは神の使いとされる。その役を終えて衣を脱いで行つたのか。脱がれた衣の見事さがセミナリヨ跡だけに神の意を感じるのだ。

春満月水のおふれる棚田かな

木戸 明子

眼前に観ているのは満々と水が張られた田植え前の棚田、今年も稲作農事が始まる。父祖の時代から嘗々と築いて来たその棚田の田毎に、春満月の光が溢れる。

春霞父愛唱の曲歌ふ

河内山裕美

父がいつも歌っていた歌を気が付けば口遊んでいる。模糊とした湿潤な春霞の中では、全てが柔らかく眠くなるような幸福感到に溢れる。

小春日や古書店街にカレーの香

河野 悦子

古書店街。本好きの輩にとつてはこの上ない至福の時空である。舞台装置は整った。そこにどこからともなくカレーの香りが…。完璧な至福の時空となる。

清明や烏柄杓が丈のばす

竹本チエ子

清明は「清浄明潔」の略で二十四節気の一つ四月五日頃で、烏柄杓が草丈を伸ばすと詠む。半夏生の頃緑色の仏炎苞をもつ花穂をつける独特な烏柄杓である。

オムライスくると春を包みけり

橘 美泉

春の浮き浮きとした幸福な気分を見事に詠いあげる。巧いなあと思う。如何にも美味しそうな卵の黄色は、春と作者の気分と赤いライスをくると包むのだ。

山寺の小さき地蔵も花疲れ

田中 和子

まるで、原田泰治や吉田直人のナイーブ画を見ているような気分になれる。花に埋もれた山寺の最も華やぐ季

節だ。小さきお地藏様への思い遣りが優しい。

翡翠の美しき飛翔にみる殺意

田中 賢治

「溪流の宝石」とも言われるカワセミ科の留鳥である。背の青緑色が美しくまさに翡翠色^{ひすい}。しかしその美しい一閃の急降下は水中の小魚を捉える殺意の他何物でもない。

対岸は山陽本線瀬戸の初夏

槌崎 道

周防大島にお住いの作者。大島大橋を渡ってすぐの国道は山陽本線に平行している。瀬戸内海に浮かぶ大島ならではの景。初夏の清々しさが縷々伝わる。

可愛い目した青蛙あの声か

千々和美佐子

金メダリストの入江聖名がジャイ子と名付けて蛙を飼っているということで脚光を浴びた蛙。径で見かけた青蛙と目が合った。寢床で蛙の声を聞く、あの蛙かと…。

雀の子始めて出合う潦

土手 敏子

孵ったばかりの雀の子。外界は初めて見るものばかり。よちよち歩いて潦の処までやって来た、雀の子にとっては大海だ。戸惑って立ち止まっているのが可愛い。

朝刊の匂ひ広がる若葉風

中田 裕子

若葉風の清々しい朝。胸いっぱい吸い込めば肺細胞の隅々まで満たされて行きわたる。その中で朝刊を開く。刷りたてのインクの匂いの清々しさは朝の一頁となる。

作品鑑賞（第八十四号）

片山 淳子

囀りや絵本にたっぷりある余白

中塚紀代子

絵本のお話の主人公は森の動物達。たっぷりある余白の中には、小鳥の囀る声が満ちあふれています。すっかり童心にかえって楽しめる一句です。

春風や消毒液の柏手す

西村 玲子

神社に参拝し柏手を打つとすれば素直な読み方ですが他の場所でも消毒液をつけ手を合わせれば祈る気持になります。春風は心に安らぎを与えてくれます。

新しい物語がはじまる小さな草の芽

久光 良一

小さな草の芽はすくすくと育ち、やがて花を咲かせ実がなります。その実が地上に落ちて、次の年にはまた新しい物語がはじまるのです。

立ち止りしては在所の花蜜柑

久行 保徳

白い五弁の小花がすがすがしい香りを漂よわせるのは蜜柑の花です。その香りに幾度も立ち止まっては昔を懐かしむのも、ここが在所であるからでしょう。

サンドイッチのやわな断層小鳥来る

平川扶久美

やわな断層といえば玉子サンド。白いパンと黄色の玉子の食感にはホッとする寛ぎがあります。富安風生に、

「小鳥来て午後の紅茶のほしきころ」があります。

カレンダーめくれば居間に夏兆す

藤井 邦子

四月のカレンダーをめくれば五月。緑も鮮やかな光景が現れ、忽ち部屋中の空気が一変し夏が訪れます。

古民家の木目涼しき夕ごろ

藤井八重子

古民家は風景に溶け込んでどっしりとした佇まい。その木目の涼しさは、時の流れと住み継いだ人への思い。しみじみと感じる夕ごろです。

古雛修羅を見て来た疲れかな

藤井 康文

雅びな古雛ですが長い歳月の間には戦争もくぐつてきました。十二単はほころびても上品さは失われません。古雛へのいたわりといとおしさに共感しました。

この町を一步も出ない黒日傘

堀口 孝子

コロナ禍の中で自粛生活を余儀なくされている今日の情景です。旅好きな作者のためにも、一日も早い収束を祈りたいものです。

一心に花ふぶくつかまるものなくて

堀 節誉

花ふぶきになりきっている一句。風にまかせて、ただ一心に舞うほかはない花びらです。

屠蘇祝うももせ近き母の背ナ

槇田 敦子

数え年の百歳をお迎えになるのでしょうか。最高にオススメです。お母様の丸くなられたお背ナも有

難く思われます。

ポンポンダリア笑えば乳歯抜けており 松原 君代
ポンポンダリアと言っただけで可愛い子供が踊っているようです。一緒に笑い合えたら、どんなに楽しいだろうかと思っています。

老鷲に今朝も背中を押されている 松本 清水

朝の清々しい空気の中に響いてくる老鷲の声は、「さあ今日も一日、元気で頑張ろう」と呼びかけてくれます。

縁側に小春広げて豆を選ぶ 三野 公子

収穫した豆を広げて干して選りわけます。縁側に豆と一緒に小春日和を広げるという詩的表現が至妙。

農具小屋被い尽せし蒿紅葉 森口 育美

しばらく出入りしない農具小屋は、あつという間に蒿が這い上ります。すっぽりと蒿紅葉に覆われた農具小屋は後継者のいない農業を象徴していて、華やかながら寂しい風景となっています。

春泥や曲がりくねった轍跡 保田 尚子

凸凹道や曲がりくねった道は、轍跡のつく春泥の道。ふり返れば、これまで歩いてきた我道だとの感慨。

六道の風一頻り若葉寺 安永 一孝

心鎮めて仏様に拝礼していると、一頻り地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道よりの風が吹いて来

ます。瑞々しい若葉のような気持で風を受けとめます。

時間軸すこしづれいる蝶の屋 山口 智子

のどかな春の昼、きままに飛ぶ蝶を目で追っている時現実なのか夢の中なのかわからなくなってしまう。

万緑や介護のバスは満席に 山下 悦子

今後益々、介護のバスが満席になる現実があります。

「万緑や」と上五に置かれたことで、介護を受けるお一人お一人のかけがえのない人生を思うのです。

棒グラフ折線グラフ春の闇 山戸みえ子

この一年半、テレビで毎日棒グラフ・折線グラフを見ます。コロナの感染者数の推移です。季語「春の闇」に複雑な思いがからみ合っています。

葉桜になるまで呪文終らない 山縣 愁平

花といえば桜。古来より桜を愛し、詩歌に詠んだ人は数知れません。蕾・初花・三分咲・満開・散り初め……葉桜になるまで、人は桜に祈りを込め、愛惜の時を共にするのです。

抽斗にもどす手紙と桜貝 阿部 友子

桜貝は桜色の美しい光沢があり、人は花びらのような軽さを愛します。一度手にしたら、大切に仕舞い込みます。この手紙も思い出が詰まったものです。そつと抽斗を閉める仕草さえ見える一句です。

会
員
作
品

天高し

井原 三都子

(光)

蝉声に急かされてゐる散歩道
亡き人の気配満つるや曼珠沙華
人垣の禿頭結構天高し
熟柿噉る師よまた逢ふ日数へつつ
初冬の潮満つる川鶉の群るる

麦
踏

石川 芳己

(周南)

麦踏みや父の足跡^{あしあと}ついてゆく
今日といふ九月の風や衣干す
水切りの少年の影秋の波
蝉時雨父の眩きかも知れぬ
白桃を食む少年の真白き齒

醉芙蓉

上石 久美子

(下松)

物足らぬ一日の終り蘭匂う
十六夜や煙のような今日一日
ピーマンのそこそこ熟れて寂しき日
醉芙蓉今ゆるやかに酔うところ
騙されてしまいたき日の醉芙蓉

雪
婆

伊藤 愛子

(山口)

懷に金星のあり神無月
茶の花に心かたむく日なりけり
冬の月たゞ合ひたくて合ひたくて
さみしさに燃ゆる他なき冬紅葉
舞ひながら浄土と思ふ雪婆

春夏秋冬

上重 石峰

(岩国)

コンサート跳ねて土筆の土手帰る
ぬっと来てさつと行きたる鵜飼舟
下男部屋の上がり框や秋の蝶
おでん屋に半世紀経て会う五人
九代は空手八段吉書揚

石路の花

上野 昭子

(光)

人死んで又死んでゆく石路灯り
なきがらの秋陽を溜める車椅子
石路の花斜め斜めを生き抜きぬ
省エネの一灯低く葉喰
アフガンの声が聞こえる十二月

曝書

尾倉 雅人

(下関)

書を曝す心すべてをさらすごと
天高しケーキの移動販売者
鰯雲私をどこか連れてって
人の世を喰ふがごとく鬼やんま
もう一度弾けてみたい鳳仙花

菊の宿

上原 祥子

(周南)

闇^{ぐみ}の在り閑^{しず}かなりしか菊の宿
白菊は白菊なりと暮れ泥む
菊の主或る女人の一生^{ひとよ}を語り
乱菊をくわへて歩く吊橋を
青い地球^{チヤウ}写るのはかの菊慈童^{ちどう}の瞳

春耕

片山 淳子

(柳井)

春耕や職歴曰く言い難し
春帽子深くいまさら相性など
越えてゆく山に暮色や梨の花
アイロンをかける誕生月五月
動かない振り時計や終戦日

淋しがり

岡田 薫

(光)

ものの芽のほぐれるを待つ淋しがり
あちこちで始動音する雪間かな
櫓穂や鎮守の杜は越天楽
グラウンド・ゼロで足踏み神の旅
鶴来たる別れ話はあとまわし

四葩

河村 加南子

(周南)

筍の二本ころがる勝手口
柔らかなナースの声や聖五月
梅雨寒やもう来るはずの無い便り
白玉の喉につると遊びけり
花も葉も小さき四葩や真珠婚

冬木の芽

ひたすらに輪を描く冬の鳶の笛
日が落ちて木霊の帰る枯木山
生命線たどれば雪の降る曠野
その中に父の声する冬木の芽
虚無虚無と啼く鶯の身の軽さ

河 村 正 浩

(下松)

立ち位置

人遠き生きる立ち位置天高し
目をつぶり泣くだけ泣きて秋の晴れ
たわいない話に救われ今朝の秋
カーテンに涼風吸わせ未来向く
吊し柿人住まぬ家の艶めきし

河 内 山 裕 見

(宇部)

大花野

曖昧な返事の返る夕端居
陽の匂う秋の簾を巻きにけり
コスモスのどこも正面揺れ止まず
風止んで退屈そうな芒原
あみだくじ行きつくところ大花野

木 戸 明 子

(下松)

秋日影

衰ふる覚悟の真紅曼珠沙華
しばらくは雲の離さぬ月仰ぐ
月光の深くしてゐる森の黙
ここが好きこの石が好き秋日影
もう少し縫ふ糸通す夜長かな

河 野 悦 子

(山口)

八十の夕

古障子張替え終えば冬夕焼
日向ぼこ背すじのぼして草の山
誰を待つおいでくとススキ原
身に入むや妣の口ぐせ八十の夕
体に湿布畑すくすく秋野菜

木 村 幸 子

(宇部)

詩人の貌

夙へ詩人の貌の道祖人
誕生を祝う小島の^{いづはり}風
園児等の背丈に並ぶチューリップ
卯の花の垣根を越ゆる長話
田水して峡の一村光らしむ

せ い き た か し

(下松)

冬うらら

武居 絹枝

(下松)

認知症検査終りて冬うらら
鍋の中秋にぎやかに喋り出す
摘草やおしゃべり上手な鳥といて
生命線の嘘ついちゃって木の葉髪
ばかりとあるこの時間亀の鳴く

長き夜

田中 和子

(字部)

兄の背を追いかけてはぐれ草いきれ
くずし字を元字に挑む長き夜
放課後にバツハのフーガうろこ雲
魔女なる日も我として生くハロウィーン
ねじ切れたオルゴール眺め冬支度

庭の花

竹本 チエ子

(光)

萱草のひと目のいのち十五、六
鬼灯をさけば袋の中ひろき
弁慶草とりごし苦勞むかしから
虫の音の細りゆく夜を目覚めおり
起き出して今年最後の月下美人

風鈴

田中 賢治

(山口)

剪定の空に庭師の筆記体
白昼夢崩さぬように走馬燈
風鈴の音色泳がせワイングラス
人情も汗も昭和の匂うひと
語り部のめがねの奥のきのこ雲

落穂

橘 美泉

(下松)

豊かなる世に生き落穂拾いけり
五人目に女の子の生れて柿たわわ
冬の虹残して旅の人となる
小鳥来て独りの鍵の隠し場所
角砂糖ゆっくり溶けて冬に入る

月

田村 美和子

(下松)

飛ばされつ麦わら帽の走りをり
新涼や裏表なき女が好き
すず虫やハートの翅をふるわせる
名月を愛でてお酒のもう一杯
幼子が昆虫網で月を捕る

旅する蝶

千々和 美佐子

(下松)

病む人の木戸にも鍵や十葉咲く
老猫の行ったり来たり稲光
重源の縁起携え盆の僧
コスモスの愛を育む迷路かな
発つ蝶に再会約す藤袴

見える風

西村 玲子

(下松)

蜘蛛の囲や見える風より糸を張る
藤袴人を恐れず蝶の群れ
金木屋空き家のポスト届きけり
草紅葉緋鯉の色と競いけり
松陰像膝の冊子に紅葉降る

牡蠣の頃

土手 敏子

(周防大島)

牡蠣打女こつと仕留めし泣きどころ
はすかひに昼の月引く冬桜
阿羅漢の笑ひと涙初時雨
木守柿いつしか熟柿古墳丘
茹で上げし冬蛸正座致しけり

蕎麦の花

野村 みどり

(周南)

北東へゆく一輛車蕎麦の花
清流のおとを音とす里の秋
はらりと野花に添へて花芒
夜泣石の右へ寄り添ふ杜鵑草
残生を止め置きしは野のすみれ

残暑

中田 裕子

(下松)

廃れ屋に咲き誇りたる凌霄花
重ね吊る絵馬に紛れし残暑かな
涸水に触れる指先涼新た
赤とんぼ嬉しきことの湧く如し
水鳥の羽ばたき夕日散らばれり

指定席

久光 良一

(田布施)

干潮の浜に人無く年寄りの多い町
時間がたつぷりある日の赤い花を買う
目があった猫を黙殺した暑い午後
いつも自然にそこに座る片隅の指定席
虫の声にも情があつて夜が秋めく

三極の花

手庇の中双鶴の凍てにけり
三極の花けぶらせる都濃郡
藪椿だんまり坊と擦れ違う
鳩尾が少し愉快に春の雷
一瞬が重なるように青岬

久行 保徳

(周南)

山笑う

春月を浴び母子像の翳りかな
黙尽くす土偶の乳房山笑う
雨蛙青をきわめて丸く居る
み佛はしずかに灯し夕かなかな
ボタン押すだけの炊飯水澄めり

藤井 八重子

(下松)

笑うつぼ

笑うつぼ違う二人や草の餅
東行のおもしろき世を蛇奔る
睡蓮のしずかなあくび魚跳ねる
わくら葉や切手を貼らぬ手紙あり
冬泉の底より竜の寢息かな

平川 扶久美

(下関)

木の実落つ

蓮の実の真黒に照りて粒揃ひ
秋蝶と急ぎ渡れり交差点
落葉掃くそばから落ちる並木道
海に向く燈の石段木の実落つ
菊日和高齢多きレストラン

堀口 孝子

(周南)

泡立草

無花果買う子供の頃は挽ぎ放題
人住まぬ庭を占拠の泡立草
干柿を頬張る夫の顔緩む
買物の梯子をするや小春の日
散らばって赤い実映える藪柑子

藤井 邦子

(下松)

アラビア数字

蜥蜴死すアラビア数字に弱いから
手の中に空蟬いるのにまだ迷う
全身全霊躊躇して毛虫踏む
深夜落雷ひとりみちびく結論
満月に頼らず立っている歯ブラシ

堀 節 誉

(宇部)

枇杷の種

槇田 敦子

(長門)

百歳の母の鼻唄若葉風
晩年は篆書の明るさ花うつぎ
枇杷の種こつんと叱責された日よ
ひとつつつ葡萄の宇宙を洗いおり
涙腺の果てになまこの目玉置く

父の日

森口 育美

(周南)

父の日に少し張り込み腕時計
紫陽花苑頑固親父の目が笑う
故郷の低く連なる夏の山
コーヒーカーップ逆さにしたる夏の雲
青天に稲刈る匂い撒き散らす

晩秋

松本 清水

(長門)

いつからか秋夕焼けの色たどる
うかうかと生き晩秋がむず痒い
うつし世は夢か檸檬を噛んでいる
これでよし銀杏落葉と肩を組む
海鼠腸啜るあすあさってもきつと晴れ

平行

村上 舞香

(山口)

春一番恐竜から僕まで
人類の影から蜻蛉まっすぐ
長き夜の水にならず鳥にならず
浮遊して私が夕立だった頃
生活と平行に伸びゆく燕

瓜坊

三野 公子

(下松)

蝌蚪ふえて村の風化が治まりぬ
梅雨籠り膝に乾びしごはん粒
校長が瓜坊を追ふ二時間目
無医村に長寿の多し柿たわわ
風花や電話ボックスある峠

家系図

保田 尚子

(下関)

想定のできぬ世の中落葉踏む
日ノ丸を背負う背中や夕焼けて
夏館のぼり詰めれば海展く
秋風に海馬の熱をさらしけり
家系図に踏んばっている家守かな

ひよんの笛

安永一孝

(山口)

ひよんの笛教はりし樹下杜しづか
宗祇句碑晩秋の日を導きぬ
眼鏡ふく机上のいろの風邪ごこち
冬紅葉風ひというに墨入るる
木犀の闇足音を隠しけり

更衣

山戸みえ子

(下関)

制服の列のまぶしき更衣
朝顔を咲かせて古き商店街
蓮の花鐘撞堂を囲みたり
秋微雨濡れたる猫が帰り来る
売地札一区画あり葛の花

蝸牛

山口智子

(宇部)

日常の余白たつぷり蒸鱈
ふところに海と椿を持ち母よ
靴音を追って靴音凍る夜の
動くさま見せず動きぬ蝸牛
足の向く先に補陀落秋の雲

紅葉して

山縣愁平

(山口)

紅葉してさりとて本音は変わらない
塔の影椿の方へうねりけり
わが鼻は素直に高し金木犀
黒白を問うには遠き曼珠沙華
秋の水仏も顔を洗うのか

無人駅

山下悦子

(下松)

万緑を丸ごとかかえ無人駅
道祖神少し傾ぎて柿若葉
吹かれ来て何話し合う落葉かな
板金の音軽やかに秋日和
どんぐりに足くすぐられ雑木山

遠青嶺

松原君代

(光)

遠青嶺雲の艦隊従えて
白萩や巫女の緋袴翻る
父の忌も母の忌も来て金木犀
郁子の実の人知れず垂れ父祖の山
草虱父のゲートル巻き直す

山口県現代俳句協会勉強会

平川 扶久美

令和三年十月二十一日（木）、第三十回山口県現代俳句協会勉強会を開催しました。岩国市の上重理事の担当で、岩国市「サンライフ岩国」を会場としました。

吟行地は、岩国城、錦帯橋、吉香公園周辺の観光地として賑わう界限です。コロナ感染も落ちつきつつあるとあって、修学旅行生や幼稚園の子供達、年齢様々な人々の動きも垣間見られました。

頂いた「散策モデルコース」の絵マップの全てを歩くにはとても時間が足りませんでした。秋ならではの穏やかな気候と歴史の趣きを肌で感じ取ることができました。十三時からの勉強会は、忌憚のない意見や率直な感想が述べられ、充実した有意義な時間となりました。

遠ざかっていた句会や吟行が、日常に戻りつつあります。年に一度の参集のこの勉強会が、さらに繋がってけば良いと感じ入りました。

会員以外の方の参加も歓迎しております。

当日作品

（参加者十八名）

仰ぎみる五橋の背裏水の秋

野村みどり

下男部屋の上がり框や秋の蝶

上重 石峰

武士の貌で闊歩す秋の橋

橘 美泉

穴惑うことなき蛇のルビーの目

河村 正浩

その辺で曲がれば錦帯橋の秋

上石久美子

伏流の醸す新酒や錦川

槇田 敦子

鳥声に耳大きくすそぞろ寒

木戸 明子

はんなりと千代菊月の橋渡る

久行 保徳

海渡る蝶は祈りの翅合わす

平川扶久美

香川家長屋門の暗がり昼の虫

木村たけま

曇天を切り裂く小次郎像の剣

高山 春江

槍倒し松大見得切って秋惜しむ

藤井 康文

円陣の広がる子等や冬桜

千々和美佐子

厩門昔のままに石路の花

藤井サカエ

にぎやかに修学旅行水澄めり

堀口 孝子

公園は青空サロン小鳥来る

三野 公子

切り取り線

題名	
----	--

地名	
氏名	

[illegible]

投句先 千七百一〇八六三 下関市伊倉本町十四—三

平川扶久美方
山口県現代俳句協会事務局

電話・FAX 〇八三—二五四—三七三二

作品募集(第八十六号)

☆ 山口県協会員・準会員

雑詠五句

☆ 締切日 令和四年五月末日

☆ 多くの皆様のふるつての御参加を

お願い申し上げます。

☆ 送付先

〒七五一〇八六三

下関市伊倉本町十四―三

平川扶久美 方

山口県現代俳句協会事務局

TEL&FAX 〇八三(二五四)三七三二

令和3年度 山口県現代俳句協会基金状況 (2)

(敬称略)

氏 名	口数	地区	氏 名	口数	地区
伊 藤 愛 子	1	山口	中 塚 紀代子	2	宇部
上 石 久美子	2	下松	西 村 玲 子	1	下松
上 野 昭 子	2	光	野 村 みどり	1	周南
尾 倉 雅 人	2	下関	浜 本 直 子	4	下関
木 戸 明 子	1	下松	久 光 良 一	3	熊毛
河 野 悦 子	1	山口	藤 井 八重子	2	下松
清 木 たかし	2	下松	堀 口 孝 子	3	周南
武 居 絹 枝	2	下松	槇 田 敦 子	3	長門
田 中 みちこ	1	山口	山 下 悦 子	2	下松
田 村 美和子	1	下松	伊 藤 惠美子	2	周南
田 村 葉	2	山口	木 村 武 馬	1	周南
千々和 美佐子	2	下松			
土 手 敏 子	3	大島郡			
中 田 裕 子	2	下松			

(1口1,000円) 令和3年8月1日～11月末日現在

☆払込取扱票が挿入されている方は令和3年度会費1,000円お願いします。
併せて募金ご寄付いただければ幸甚に存じます。

◆告知板

令和三年度新入会員

岡田 薫（光）

令和三年度新入準会員

高山 春江（下松）

藤井サカエ（下松）

◆あとかき

種から植えた美男葛が、五年目にして美しい沢山の実をつけました。野放図に伸びる蔓を家人に疎まれながらも育てていました。熟した果実を干したものは「南五味子」と称し、咳止め、滋養強壮の漢方薬にするそうです。新鮮な若い葉は揉んで切り傷に塗り、若い蔓の粘液は男性の整髪料にと使われていました。

檀・山帰来・野茨・莢蒾・珊瑚樹・冬苳等秋から冬にかけて実る木の実の色は、赤色が一番多いと言われています。それは、冬の寂しい景色と心に彩どりを与えてくれて嬉しくなり、癒されます。因みに美男葛の花言葉は「再会」「また逢いましょう」「好機をつかむ」とありました。

令和四年寅年が皆様にとりまして実り多き年となりますようにお祈り申し上げます。

（平川扶久美）

☆事務局

郵便番号 七五一〇八六三

住所 下関市伊倉本町十四―三

平川扶久美 方

TEL&FAX 〇八三―二五四―三七三二

☆経理部

郵便番号 七四四―〇二七一

住所 下松市米川下谷二一九

橘 美泉 方

TEL 〇八三三―五三―〇〇二五

振込口座番号

〇一三九〇―九―〇八九〇三八

現代俳句やまぐち第八十五号

令和四年一月二〇日発行

発行所・山口県現代俳句協会事務局

発行人・久行 保 徳

編集人・平川 扶久美

印刷所・株式会社ふじたプリント社

周南市久米三九一八